

日本人のみた外国 カエリチャのカルメン（カルチャー・ショック）

著者	牧野 久美子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	135
ページ	45-45
発行年	2006-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005352

カエリチャのカルメン

牧野久美子

日本では、忙しいだの何だのといって、なかなか劇場に足を運ばない私だが、ケープタウンに住んでいたときは、しょっちゅう舞台を観に行ったものだ。南アフリカには一一の公用語があつて、舞台の上で多言語が飛び交うことも多く、台詞をすべて理解できることのほうがむしろ稀である。しかし、最初はそのことにフラストレーションを感じても、いつの間にか気にならなくなり、終演の頃にはすっかり舞台の世界に没入してしまう。とりわけ、ミュージカル仕立ての作品で「はずれ」と思ったことは一度としてない。歌も踊りも、とにかく桁外れにパワフルなのだ。その迫力を感じるとるには、生で舞台を観るのが一番だが（できれば汗や唾が飛んでくるのを覚悟して前列のほうに陣取つて）、舞台を映画化した作品もまた素晴らしいものがある。

南アフリカのミュージカル映画、といえばアパルトヘイト体制への中高生の抵抗を描いた「サラフィナー」(Sarafina) が有名だが、最近の作品で私が感心したのは「カエリチャのカルメン」(U-Carmen ekayelisha)だ。これは「ビゼーのオペラ「カルメン」を、現代の南アフリカに大胆に移植し翻案したもので、タイトルにあるカエリチャとは、ケープタウン近郊のタウンシ

ップ(アパルトヘイト期に黒人居住区とされた地区)の名前である。原作のカルメンは「ジプシー(ロマ)の女」だが、カエリチャのカルメンは、勤務先のタバコ工場の同僚たちと「ジプシーズ」というクワイア(合唱団)を結成している。このように設定を少しずつ変えつつも、物語はほぼ原作の筋どおりに進んでいく。

貧しくも、活気あふれるカエリチャの町に、カルメンの物語は不思議と馴染む。カエリチャのカルメンの服装は、普段着のTシャツにぴたぴたのパンツといい、日曜日のちよつとよそゆきのドレスといい、南アフリカのごく普通の女性そのものだ。ところが、そんな登場人物たちが、カエリチャの路上やシビーン(居酒屋)で、フルオーケストラつきの「カルメン」全曲を見事に歌い上げるのである。しかも、すべてコサ語(カエリチャで最も多く話されている言語)で。この作品で最も苦労したことの一つが歌詞の翻訳だったそうだが、クリック(舌打ち)音を特徴とするコサ語の語彙が、楽曲のリズムにぴったりはまっている。カルメン役のポリーン・マレファアネの歌うハバネラの美しさ、妖しさといったら!

映画に出演しているのは、「ディンポ・ディ・コパネ」(Dimpho di Kopane)とい

う劇団のメンバーである。南アフリカ各地で開催されたオーディションで選ばれたメンバーのなかには、それまで演技や歌の特別な訓練を受けたことなかった人たちも含まれるというが、まさにディンポ・ディ・コパネ——「才能の集まり」という意味——という劇団名にふさわしく、それぞれが素晴らしい才能と個性をもっている。コサ語の「カルメン」は、もとは彼らの舞台作品であった。彼らの作品は、聖書や西洋古典をアフリカの文脈に引き付けて再解釈するものが多く、「カルメン」に続く新作映画は、イエス・キリストがアフリカで生まれ、圧政と闘う革命家となるという筋立ての、「人の子」(Son of Man)という作品だそう。

「カエリチャのカルメン」は二〇〇五年のベルリン国際映画祭で、最高賞の金熊賞を受賞した。私は幸いにも、南アフリカ大使館主催の映画祭でこの作品を観る機会に恵まれたのだが、日本での一般公開は未定とのことである。ディンポ・ディ・コパネの来日公演が実現すれば何より嬉しいが、せめて映画だけでも日本で観られるようになれば、と切に願う。

(まきの くみこ/アジア経済研究所地域研究センター)